

氏名（本籍）	朴 眩姝（韓国）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第101号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉内なる光（Inner Light） 〈論文〉内なる光（Inner Light） －ひとつの信仰としての「絵画的オブジェ」－
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 佐藤一郎
（論文第1副査）	〃 助教授（〃） 井村彰
（作品第1副査）	〃 教授（〃） 坂本一道
（副査）	〃 〃（〃） 野田哲也
（〃）	〃 助教授（〃） 保科豊巳

（論文内容の要旨）

「内なる光Inner Light」は私の心の内奥を照らし出す鏡のようなものである。偶然に生じた光の視覚的現象を、私は、自分の生への反省行為と見なしている。複数の「絵画的オブジェ（Plane Object）」を壁に設置し、照明を当てると、そこに現れたのは金箔面による反射光線が織り成す光のイリュージョンであり、まさに発光源となる光そのものがあたかもそこに存在するかのような錯覚を生じさせた。「内なる光Inner Light」がもたらす光のイリュージョンは、通常いわれる絵画におけるイリュージョンと異なる。それは、光の現象であり、制作者としての私が作り出したのではなく、「投光（Projection）」によって生じた幻影の世界である。この光の視覚的現象は、本質の外面的な顕れであり、物（Material）のカテゴリーを越えた世界としての光のイリュージョンである。本論文は、「内なる光Inner Light」が、視覚的現象がもたらすイリュージョンであることを発見（認識）するに至る経緯を、一連の思考と制作の流れをたどりながら、第1章から第4章まで順次述べている。最後に、地塗りの実習とテンペラ画の模写実習を技法ノートとして附した。

第1章 光への目覚め（変形された生命体／フラ・アンジェリコとの出会い）

第2章 光の知覚（平面性／光と事物／対象化／開かれた反復性）

第3章 光の再現（光輝く白亜地／光をもたらす金箔技法／テンペラ画／白色絵具）

第4章 光への反省（イリュージョンとアウラ／イメージの循環と浄化／未完のための完）

第1章では、私が絵画制作を続ける過程で、「どのようにして光について考えるようになったか」を述べる。私にとって光とは、生命体の生成と消滅に基づいて生まれる生命の光であり、いわば「内なる光」である。「内なる光」を作品のテーマとして取りあげるに至った背景には、1998

年以前の絵画制作の流れが絡み合っている。ひとつは、1996年から2年間行われた「変形された生命体 (metamorphosis)」という作品シリーズと、もうひとつは、ほぼ同時期に行われたフラ・アンジェリコの模写作品である。光に目覚めたことには、生命体への思いが基調になり、ちょうどその時期出会った聖像画の模写が、絵画における光を認識させるきっかけになった。

第2章では、絵画の四角い画面をひとつの物質とみなし、四つの側面を強調した結果、作品はオブジェ化されたが、これを、私は絵画の平面を対象化したという意味で「絵画的オブジェ (Plane Object)」と呼んでいる。絵画における「平面性」と「光」をひとつの対象、あるいは、客体と見なしたことで「内なる光 Inner Light」の作品が生まれた。この第2章は、「絵画的オブジェ」について、私と絵との間で生じる関係性を根拠に置きながら、絵画の平面性、光と事物、対象化、そして反復性の項目で考察している。

第3章では、実際の作品の中で、絵画における光を積極的に取り入れることについて述べる。それには、大きく二つの技法が用いられている。第一は、1998以前の作品「変形された生命体 (metamorphosis)」で主に使った黒鉛での体験が、聖像画の模写実習で金箔技法と出会い、光への意識を強めていったことである。「絵画的オブジェ」では四つの側面と表面を区分し、側面に金箔を貼り磨いている。黒鉛と金箔を用いた画面の効果は、光が正反射されるところで同じ光の現象が起きる。第二は、自分を取り巻く現実そのものを確認しようとした意志が、「絵画的オブジェ」の表面をテンペラ絵具で彩色する制作過程の中で現れた。それは、平面を確認していくなかで現実をそのものに直面しようとしたことである。この第3章は、実際の作品の制作過程に基づいて光がどのように再現されていくのかを考察している。

第4章は、展示空間 (白い壁) に複数の「絵画的オブジェ (Plane Object)」を設置 (インスタレーション) したとき、照明を当てると、四側面同士がそれぞれ正反射を起し、反射光線が錯綜し、思ってもいなかった光の視覚的現象が生じた。この現象は、光のイリュージョンそのものであると、私には感じられた。それは、複数の「絵画的オブジェ (Plane Object)」に照明を当てる「投光 (Projection)」によって、オブジェの物体性が消え、「現実的オブジェ (Being Object)」から「幻影的オブジェ (Vacant Object)」への「移行」を意味している。この思いがけない光の現象を観て、私は、一瞬にして私たちの生そのものを喚起した。第4章では、イリュージョンとアウラ、イメージの循環と浄化、未完のための完という観点から、この偶然に起きた光の現象について考察している。

「内なる光 Inner Light」には、相反する二つが混じりあっている。実体と幻影、現実と夢、意識されるものと無意識なものなどである。この光の現象は、偶然に生じたのだが、相反するもの同士の葛藤を解きほぐしてくれるのではないかと感じた。最後の章になるこの第4章を、光への反省と名づけ、偶然に出会った光のイリュージョンから、私は生命の光を見出していく。